



KWANSEI  
GAKUIN  
UNIVERSITY

Supported by  
  
日本  
財団  
THE NIPPON  
FOUNDATION

# 手話言語研究センター講話会

---

2016年10月2日開催

関西学院大学手話言語研究センター



## 目次

<b>第一部「人は言語をどう習得するか」 .....</b>	<b>2</b>
講師 岡 典栄（学校法人明晴学園国際部長）	
棚田 茂（埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園主幹教諭）	
司会 森本 郁代（関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター副長）	
<b>第二部「手話言語に楽しく触れ合ってみましょう」 .....</b>	<b>17</b>
講師 森田 明（学校法人明晴学園教諭）	
司会 今西 祐介（関西学院大学総合政策学部助教／手話言語研究センター研究員）	
<b>閉会の辞 .....</b>	<b>21</b>
松岡 克尚（関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員）	
<b>登壇者紹介 .....</b>	<b>24</b>

**【第一部】 「人は言語をどう習得するか」**

**講師：** 岡 典栄氏（学校法人明晴学園国際部長）

棚田 茂氏（埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園主幹教諭）

**司会：** 森本 郁代（関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター副長）

○森本 このセンターの副長を務めております、森本と申します。

ただ今から、第一部、「人は言語をどう習得するか」ということで、学校法人明晴学園の岡 典栄先生と、埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園の棚田 茂先生にお話をいただきます。

まず、お二人にお話をさせていただく前に、私から簡単に先生方の御紹介をさせていただきます。

まず、岡 典栄先生ですが、東京大学文学部言語学科、国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科を御卒業になり、イギリスのケンブリッジ大学言語学で修士号をお取りになりました。その後、一橋大学大学院言語社会研究科で博士号を取得なさり、現在、学校法人明晴学園国際部長をなさっておられます。明晴学園はろうの子供たちが学ぶ学校です。同時に東京経済大学で非常勤をなさっておられ、手話通訳士の資格もお持ちです。

次に、棚田 茂先生です。筑波大学附属ろう学校を経て大学で情報数理学を専攻され、現在、埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園の主幹教諭をされておられます。棚田先生は、現在、D P R Oといいます、ろう者がろう者らしく生きていける社会を目指す団体の代表をなさっておられます。D P R Oでは、ろう文化やろう者学、日本手話などについて社会に発信しておられまして、ホームページをぜひ見ていただければと思いますが、勉強会などもなさっておられます。

また、棚田先生は、平成27年度まで日本ろう福音協会の理事として聖書の手話翻訳事業を推進してこられ、手話訳聖書アプリを発行されております。聖書の手話翻訳に対しては、世界でもトップレベルでの翻訳品質を追求なさっておられるということです。

では、早速、岡先生からお話をいただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

○岡 森本先生、ありがとうございます。御紹介いただきました、岡です。

本日のテーマは非常に大きなテーマで、「人は言語をどう獲得するか」という話です

が、私が聞こえる子供を担当して、棚田先生が聞こえない子供を担当するという役割分担でいきたいと思っています。主に、言語獲得環境の違いを話すようにというお題でしたので、大体そういう方針でいきたいと思っています。

まず、一番大事なことは、人は誰もが母語を獲得することだと思います。これは特に勉強したりとかではなく、人として生まれたらみんなが言葉を獲得するということです。本日の話の範囲の中ではないですが、それが母語であることに対して、第二言語の習得は人によって様々です。ここに一つ大きな違いがあります。

聞こえる子供は、もちろん耳から言語の習得をします。母親の胎内にいるときから、例えばドアベルが鳴ったらお腹の中でびくっとする、また胎教にはモーツァルトが良いなど言われます。市販品で「赤ちゃんのためのモーツァルト」というCDとか、教材ではないと思いますが、音楽に関する色々なものが売られています。

生まれたばかりの子供ですら、他の誰の声よりも自分の母親の声が好きらしいです。大体女の人の声のほうが男の人の声よりも好き、その中で自分の母親の声を判断し、母親の声がより好きというか、より多く反応するという研究があります。

生後4日目の子供は、既に外国語よりも母語を好むという研究の結果もあります。それぞれ古い研究ですが、つまり、お腹の中にいる間から聞いている声に慣れているし、その声の基本的な抑揚などに最初に反応し、自分が聞いているものにより多く反応することがあります。

生後7カ月頃になると、乳児は切れ目のない音の連続から単語を切り出すことができるようになるそうです。私が今このように皆様にお話ししている音声にも、切れ目はありません。ただし、どこが切れ目だということは、その言語を知らない限りわかりません。

次のポイントは、母語で使わない音は聞き分ける必要がない、ということです。例えばRとLの違いは日本語では聞き分ける必要がないので、あっという間にこの区別は捨ててしまい聞き分けられなくなるのです。でも、捨てることは、逆に言語習得にとってはとても重要なことなので、そういう仕組みが入っていると思っていただければよいと思います。

切れ目がない音の連続から、単語を切り出すことができるのはどういうことかというところ、皆様御存知かもしれませんが、アメリカでの例を挙げます。バスを降りる際に、「I get off (おります)」と言わなければならないのですが、どうもうまく通じませ

ん。ある時、よく聞いてみると、どうも「あげどうふ」と言っているみたいだな、ということで「あげどうふ」と言ってみたところ、きちんとバスがとまってくれて、無事降りられたという話があるぐらいです。日本人にとって「あげどうふ」というと、揚げ豆腐をイメージするかもしれませんがね。音は、もともと切れ目切れ目があって出てきているわけではなく、全部つながっているのですが、その中で、自分で切れ目が発見できる。

日本人が英語を聞こうとしてよく失敗するのは、I、get、offという3つの単語が来るだろうなと思っているから聞こえないのです。けれど、揚げ豆腐 (Igetoff) という一つの塊だと思って言えば、よっぽどIとgetとoffをばらばらに言うよりも通じることがあります。掘った芋いじるな (What time is it now) も、切れるようになることは、この言語がわかっているということです。ずっと、What time is it nowと聞こえるのを待っていても、そういう風には聞こえてこないのです、わかりません。だから、音がつながっているのを、意味がある単語に分けて区切ることができるのは、言語習得が進んでいると言えらると思います。

もともと一塊で覚えているのは、赤ん坊の場合よくあります。例えば、「知らない」と、小さい子はよく言います。本当に知らないから「知らない」と言ったり何か悪いことした時に、「知らない」と言ったりしますが、「知る」と「ない」の二つに分けられることがわかるようになるまでは、まだまだ時間が掛かるかもしれません。もちろん、小さい時には塊として表現全体を覚えていることはよくあるのですが、不思議なことに私たちの耳は、外国語を初めて聞いたらどこが切れ目かわからないけれども、母語に関しては生後7カ月半か8カ月で、わかるようになります。

赤ちゃん言葉には、切れ目を間違えたようなものが結構あります。例えば、「めががいたい」や「ちががでた」は、目や血は一音節で一単語になっていて、小さい子は「めが」や「ちが」が一つの単語だと思ってしまい、そこにまた「が」をつけて「めががいたい」や「ちががでた」となることがあり、これは切り方間違いみたいなものです。

一音だけだと、小さい子には聞き取りにくいので、小さい子が使う言葉は、よく同じ音が繰り返されていることが多いです。「おめめ」や「おてて」や「おみみ」などです。本当の赤ちゃん言葉の中に、お腹のかわりに「ぼんぼん」と言ったり、足のかわりに「あんよ」と言ったり、「わんわん」、「にゃんにゃん」の様に同じ音の塊が2回ずつ繰

り返されているのはよくあります。多分、これは塊として聞きやすいからです。短過ぎるとつかまえにくいので、繰り返してあげているという感じだと思います。

例えば、幼児語を使うのが良いのかどうなのかという育児論の様なものがあります。「うちでは、ブーブーなんか絶対言いません、車と言います。」といった様なものです。でも、赤ちゃんにとって、少なくとも発音の仕方から言えば、ブーブーのほうがはるかに楽で、「くるま」という発音ができるようになるまでは、相当まだ時間が掛かると思うので、早いうちに自分で発語を楽にしてあげるという戦略もあると思うのです。

そういう環境の中で聞こえる赤ちゃんはどんどん育っていくのです。環境という話をしますと、聴者同士の会話は、耳は実は指向性があって、前のほうに向かって付いているのですが、後ろから話しかけられても聞こえるので、バギーを押しているお母さんは、結構話しかけています。まだ絶対言語習得前ではないかと思うような赤ちゃんにでもずっと、「ほら、お花が見えるわよ」などと話しかけています。

以前、保育園の先生が両手に3歳ぐらいの子を一人ずつ捕まえながら、どこかへ走っていかないように押さえている光景を見ました。その時でも「ほら、あそこにお店屋さんがあるわよ、先生と一緒に行く？」とずっと話しかけていました。これをもし手話でやろうとしたら、手を離さなければならないので相当苦しいと思います。そのうちに子供はどこかへ行ってしまうかもしれません。でも、聞こえる親たちや先生たちは、コンスタントに話しかけていますね。

バギーでも最近是对面式の物がありますよね。つまり、私たち聞こえる人間は、目と目、顔と顔が合っている必要はないので頭の後ろから沢山話しかけている状況で育っていきます。同じようにお母さんが子供を自転車の後ろに乗せても、お互いに一方向を向いて話は成立します。先日聞いた話ですが、お母さんが子供の歌を聞いていた時、「今のよく聞こえなかった、もう一回歌ってくれない？」と言っているわけです。よく聞こえなかったのは本当かどうかわかりません。でも、そうやって子供の言語学習を進めているというか、後ろからでもどんどん話してもらおうチャンスを作っていると思います。

目と耳の大きな違いは、私が思うには、目は閉じることができる。意図的に話を聞きたくなければ目を閉じればいいのですが、耳は残念ながら閉じてくれません。常に情報は嫌でも何でも入ってくると思います。

逆に言うと、努力しなくても情報は常に入ってきて、たまたま隣の人が話しているのを聞いたとか、別に何かを勉強しようと思っていたわけではないが、近くの人が話しているのが聞こえたという様な、仄聞や偶発的学習がいつも起きています。なぜなら、それは耳を閉じられないから嫌でも聞こえてしまうからなのです。ろう児の場合には、そういう偶発的な学習をする機会が比較的少ないです。見なければならぬという場面で、全てに意図的な学習が必要なのかな、このところが大変だなと思うことがあります。

私は耳が聞こえないことが不便で、かわいそうで気の毒だ、大変だと言いたいわけではなく、私たちのお母さんが頭の後ろから話しかけていたように、彼らには彼らの別の方法がきっとあるのだろーと思ひます。

逆に、手話のお得ポイントもあって、例えば新幹線が出発しても、相手に顔が見えれば窓越しに話せます。また、手話だとお互いが見えさえすれば建物の1階の人と2階の人とが普通に話せるのです。手話関係は、棚田先生からお話があると思ひますが、ギャロドット大学という、アメリカのろう者のための大学でも色んなところで視線が確保できるような建物になっていると思ひます。お互いの顔さえ見えれば、どこでも話ができる環境がつくられています。

もう一つ、ろう学校に勤めている関係でろうの情報が多くなりますが、ろうの赤ちゃんに多い、反り返りがあります。これを心配した親御さんが小児科医などに連れていくと、この子には自閉の傾向がないかと、脳性麻痺がないかを見てもらってくださいとよく言われるそうです。本当にそういう可能性もあるのですが、私たちが経験的に知っているのは、ろうの子供は本当に色んなものが見たいのです。自分の頭が動く範囲を越えても、右にも左にも見たいし、後ろも見たい。だから、どんどん反ってしまうのです。ろう学校の中では普通の子によく見られるケースなので、何もほかの要因を心配していただく必要はないのだと思ひます。本当に見たい、どこまで回っても見たいだけなのです。

物凄く駆け足で、聞こえる子供の言語習得の話、どういふ環境で起きるのかというお話をし、少しだけろうの例をご紹介しましたが、最後に、日本語と日本手話は別の言語だといふところから始めないといけないなと思ひています。

ろうの子にとっては、手話の獲得が母語の獲得です。聞こえる子供は、塞げない耳に入ってくる情報をずっとためて音声言語ができるようになるのですが、ろうの場合は、

本質は音声言語獲得と同じことなのかもしれませんが、環境と方法は違うかもしれません。けれども、日本語も日本手話も共に対等な人間言語であることは間違いなく、その間に優劣はありません。ただ、モダリティが違うだけだということです。モダリティとは、言語を理解したりあらわしたりする時に使う体の部分です。聴覚と声という組み合わせか、視覚と動きかという表出の違いがあります。それぞれの言語に合った方法で言語習得が行われ、そして母語であれば誰もが獲得するということだと思えます。

私たちにとって残る最後の疑問は、第二言語としてろう児が日本語を習得する時の方法が、聞こえる子供の習得方法と同じでいいのかということです。これを変えなければ同じようなレベルにまで、効率よく第二言語として日本語を習得することは難しいのではないかなと思っています。ですので、視覚優先のろう児に合った日本語習得の方法、指導法を考えていきたいと思っています、それが最後に残る疑問として皆様に提起したいことです。

以上です。

○森本 岡先生、どうもありがとうございました。

棚田先生、お願いします。

○棚田 大宮ろう学園の棚田と申します。現在、大宮ろう学園では幼稚部から高等部、専攻科まであり、15年間学べる環境となっています。

まず、「ろう」に対する見方としては、病理学的モデルと障害の社会モデルがあります。これは聴力により、幾つかの段階に分けた考え方です。聴者は聴力が大体20デシベル位だと言われています。そしてこの数字が大きくなればなるほど、聴覚障害の程度が重くなります。ろう、重度難聴の場合は、ジェット機の音がかすかに聞こえるか聞こえないぐらいの聴力です。次に、高度難聴は、大きな声などが聞き取れる。中度難聴は、電話の音が聞こえる程度。軽度難聴の場合は、静かな環境であれば会話ができる。また、ろう・重度難聴の聴力レベルでも、人工内耳装着の場合は、比較的聞こえるレベルにまでになります。医療や福祉事務所などでの判断は、このような聴力レベルに基づいており、これは病理的見方、また障害の社会的見方になります。

上記のような内容が聴覚障害者に対する一般的な見方なのですが、本日提案するのは、補聴器をつけているから全部聞こえるのではないということを考えていただきたいということです。蚊の飛ぶ音はろう者はほとんど聞こえません。お腹が減ったときの、

グーと鳴る音も聞こえません。また、風邪を引いて咳が出る場合、ろう者は気付かれないように我慢しながら咳をしがちですが、聞こえる人には聞こえてしまいます。補聴器をつけていても音が聞き取りづらい、何の音か聞き分けにくいということです。

さて、ろう者には手話が必要です。先程補聴器や人工内耳をつければ聞こえることができるかもしれないとお話ししましたが、その一方で文化言語モデルという、新しい考え方が提唱されました。聞こえるみなさんの第一言語は何ですか。第一言語は母語、親と会話をしながら自然に獲得するのが母語です。日本でいえば、聞こえる人の場合は日本語になりますね。ではろう者の場合はどうでしょうか。

親が聞こえる場合もあれば、またろうの場合もあります。その場合のろう児の第一言語は何になるのか考えていきたいと思います。ろう児が自然に獲得できるのは、どちらでしょうか。「自然に」です。耳でしょうか、いえ、耳は聞こえないので目ということになります。

先程の岡先生のお話の中に、聴児は生後4日目で音の区別ができるというお話がありました。その話を聞いて驚きました。耳が聞こえない場合は聞き取ることはできませんから、自然に獲得するのは目です。でも、生後4日目ではまだぼやけていて、はっきりしてくるのは1カ月くらいかかると思います。だから、反り返りをしていろいろあちこち見るのだと思います。

つまり、ろう児／者は視る人です。聞く人ではなくて視る人なのです。聞こえる人との違いは、耳で判断をするのか、目で判断するのかということです。聞こえないからかわいそうではなくて、この人は視る人なんだと御理解いただきたいと思います。ろう児／者の第一言語は手話になります。

例えば、ろう児の場合は指さしをすることが多いです。また人を呼ぶ時、机などの物をたたいたり、相手の肩をたたいたりという行動もします。これは声よりも動きが優先されるからです。手話には、目、眉の動き、手や身体の動きすべてが含まれています。

現在、ろう児に発音の指導をしているところがありますが、なかなかそれは難しいと思います。先程岡先生のお話の中で、聞こえる人は自然に音が耳に入ってきて発話ができるようになるとありましたが、ろう児の場合は自分の声がどういう声なのか自然に耳に入ってきてません。聞こえる場合は周りの声が判断できますし、自分の声も聞こえてフィードバックできますので間違えた時なども調整できますが、ろう児には声や

音の大きさ、自然な速さ、アクセントなどを調整することが難しいです。例えば、「橋（はし）」、「箸（はし）」は発音は同じなので、「橋（はし）」なのか、「箸（はし）」なのか区別ができないということです。

また、ろう者は読話が得意なのではないかと言われることがありますが、そうでもありません。例えば「たまご」、「たばこ」、「なまこ」は口の形が似ています。「おじさん」に似ているものと言えば・・・？「おじいさん」、「お兄さん」でしょうか。「1時」の場合、「2時」、「7時」に似ています。ですので、時間の約束をするときに、1時と言ったのに夜の7時に来て、デートの約束がだめになってしまうかもしれませんね。

さて、色々な人が写っている写真があるとします。その中でろう者はどこにいるか、わかりますか。ろう者か、聴者かという区別は見ただけではできません。手話をしている様子や声で話している様子を見て、ろう者だ、聴者だという区別はできるかもしれませんが、見ただけでは分かりません。

ろう者は、日本で普通に暮らしていますが、外国人のようなものです。例えば外国から来た人の場合は、言葉が通じないので外国人だということがすぐに分かります。でもろう者はどうでしょうか。外国人の場合、例えば英語やドイツ語など、親が子供に言葉を継承します。ですので、子供は親と同じ言語を使います。生物学的にもつながっています。でも、ろうの場合は、血縁関係はあっても、言葉の継承はありません。言葉によるつながりはありません。ただ、デフファミリーの場合は、親がろう、子供もろうですし、CODAの場合は親がろう、子供は聴です。もしろうの親が手話を使用すれば、子供は自然に手話を獲得することができます。つまり、デフファミリーとCODAというのは、親子で言葉によるつながりがあります。ところが、親の言語が日本語だと、ろう児との言語によるつながりが切れてしまう。でも、聴者の親は自分と同じ言葉を子供にも使ってほしいと思っている。その辺も理解していただきたいと思います。

外国人とろう者との違いは、外国人の聴者の場合、音声を自然に獲得できますが、ろう者の場合、親が聞こえると自然に親の言語を獲得できないところです。ただし、親が手話を使用する場合は、言語の継承が可能です。一般社会では、ろう者は障害者として見られています。でも、文化言語学的に見れば外国人のようなものです。

次は、ろうコミュニティについてです。ろう者のほとんどは、ろう学校を卒業した後、

自然に集団を形成します。例えば来年デフリンピック（※ろう者のためのオリンピック）が開催されます。そこで使われる言葉は手話だけです。補聴器や人工内耳は外し、みんな平等な条件のもと競技が行われます。そのようにしてろう者の集団が形成されるのですが、ろうコミュニティ＝マイノリティーグループとだけ思っていると良いと思います。

ここで大宮ろう学園の幼稚部の子供たちのことを少し御紹介したいと思います。大宮手話フォントというのは、手の形を絵にした大宮ろう学園独自で作っているものです。その絵を使って子供たちにその手の形でできる言葉を見せ、知っているかどうかを聞いたりしています。

**幼稚部の手形あそびで**



【単語リスト】（日本語ラベル計47単語）

	㇀	㇁	㇂	㇃	㇄	㇅	㇆
1	アイス	一冊	アンパンマン	指文字の「ラ」	汗	お茶	おばあさん
2	あちやん	おこる	指文字の「き」	うた	上へ爆発	鼻くそ	鼻くそ
3	男	けんか	つくる	給食	絵日記(本)	双眼鏡	鼻くそをほじる
4	きのこ	ヘリコプター	病気	指文字の「ま」	絵を描く	船	ママ
5	ハイハイ	ボクシング	たばこ	おぼけ	爆発	耳をほじる	
6			病院	鼻	ハン	約束	
7				黒	病気		
8				指挿	雷		
9				聞かれる	望遠鏡		
10				ドア	マイク		
11				バッシュと叩く			
小計	5	4	5	6	11	10	6

ずいぶん前の調査結果ですが、4～5歳のろう児5、6人を対象に手の形が描かれたカードを見せ、単語を知っているかどうか聞いたところ、手話の出現語数は全部で78単語でした。これにより、子供たちは手話を自然に身に付けたということが分かりました。

7枚のカードを使って出現した手話単語に合わせた日本語のラベルを見れば、言葉の獲得ができていたことが分かります。ビデオ収録はとても大変で、この時は短時間でのデータ取りとなってしまいました。もっと時間をかけて調査すれば多くのデータが集められ、ろうの子供は自然に獲得できる手話が多くある、という結果をお伝えすることができると思います。

さて、幼稚部の子供は教師と目を合わせてから話を始めます。例えば、聞こえる人は音が耳に入ってくると、目をそらせてしまうことがあります。その時子供はとても寂しい気持ちになります。ですので聞こえる人がもしろう児と会話をする場合、耳から音が入ってきても、それにすぐ反応せず、子供に「待ってね」と言ってから音のする方向を見ることが必要です。

友達同士の会話の時は、子供たちは自然に話す順番を決めているのです。話をし

ているところへ割り込む場合もそうです。例えば子供と先生が話をしているところに、他の子が先生と話したいとします。その時は、「先生、私を見て」と叫ぶのではなく、手を振って先生を呼びながら、話をしている子供の方を見て、先生とその子の話が終わるのを待ちます。そういう自然なルールを子供たちは身につけています。私たちが強制的に教えたのではなく、集団の中で自然に身についたものです。

他の例では、マクドナルドのカウンターで、カウンターの上にあるメニューを指さしながら100円マックがどこにあるのかを友達に示す時、「いつもは200円だけどそうじゃなくて100円マックの方のマック」と日本手話の構文を使いながら、対象物の特定化を図る姿が見られます。このような複雑な会話も、子供たちはできるのです。つまりろうの子供たちは、目で見、きちんと判断し、行動していることがよく分かります。

大宮ろう学園の幼稚部の場合、子供たちは手話で育ちます。小学部に上がると、他の所から来る子供たちもいます。例えば療育センターなど、ろう学校でなく別のところで発音などを専門的に指導しているような所です。そのような所で指導を受けて育ち、ろう学校の方が合うだろうと判断された子供がろう学校に入ってきます。その中に、声だけでコミュニケーションを取る子供がいるので、コミュニケーションの環境が手話だけではなく、バラバラになります。

まず聴力の障害が軽い子供同士は、耳を使って音声で話します。でも、聴力の障害が重い子供とは音声では話せませんので、その場合手話を使ってのコミュニケーションとなります。初めは、なかなかコミュニケーションができません。そこで、集団での場合は少なくとも手話でのコミュニケーションが必要だということで手話を用いるようにしています。ここでの手話とは、日本手話と、声と一緒に手話をする日本語対応手話（手指日本語）のどちらかになります。

今、ろう学校では様々な言語モードが混在しています。学校の先生が、例えば声と一緒に手話を使って話をした時に、わかる子とわからない子がいます。先生が言っていることがわかった子は、わからない子に通訳をすることもあります。これは全国各地のろう学校でよく見られます。

また、通訳ができるような子供たちは、自分の経験から学び力をつけています。先生は、子供が喧嘩をしている時、それはだめだといって介入するのではなく、喧嘩の様子をじっと見守り、どうしても解決しない場合のみ間に入ります。その方が子供たち

も経験値が高くなり、会話レベルも上がっていくのではないかと思います。

ろうの児童生徒の90%以上の親が聴者で、残りの10%は両親もろうです。成人のろうの人と会う機会は子供たちはなかなか少ないです。

ろう学校では、日本手話と音声日本語、どちらが多く使われていると思いますか。実際は、自然な会話の中では、様々な形が混在しています。ろう教員に対しては日本手話が多くなります。例えば、聞こえる先生だと思って声で話しかけ、ろうの先生だったということが分かると、日本手話に変えるというふうに相手により使い分けているようです。手話ができない先生には、当然日本手話が減って、音声日本語が増えていきます。

日本語対応手話（手指日本語）とは日本語が基本にあって、それに手話を当てはめていきます。うなずきや表情、眉の上げ下げなどはありません。言語として完全かというところ、そうではありません。聴者と話すとき日本語対応手話になってしまうようですが、これは自然なことなのか、でもお互い理解できないこともあるので人工言語なのか。私自身は人工言語だと思っています。その例として、「高速では車間をとって走る」を日本語対応手話でやると、/高速道路/ /車/ /間/ /取る/ /走る/ という表現になります（※ 斜線（/ /）で囲まれた単語は手話ラベルの意）。しかしこれでは意味が変わってしまいます。日本語の「とる」というのはいろんな意味があります。でも、この場合は車間をキープするという意味で /かたい/ という手話表現を使う必要があります。/取る/ という手話を使ってしまうと、間違った意味で受け取られてしまいます。子供がこの日本語を読んでいる時に、先生が /取る/ と表示してしまったら、「前の車との隙間をなくしてピッタリくっつく」と子供は勘違いをしてしまいます。日本語対応手話の場合は、1つの日本語にいろんな意味があるということを知っていなければ危険だということです。

他の例です。例えば「食間」と聞いて、食事中に薬を飲んでしまうこともあります。「朝飯前」は、本当は「簡単」という意味ですが、日本語対応手話で表すと朝食前という意味になってしまう。「えらいことになった」は「大変」という意味ですが、「えらいことになった」を日本語対応手話でやると、立派な人だ、偉くなったんだと理解する子供が出てきてしまいます。そういう時には、正しい意味を説明しなければなりません。

このように、日本語対応手話の場合は、慎重に手話表現を選んでやっていかなければ

なりません。

聞こえる人と聞こえない人には、日本語の習得プロセスに違いがあります。聴者はまわりの音声を聞いてことばを覚える。そして聞いているうちに自然に読み書きができるようになる。ろう者は周りの音声が聞こえていないため、目による情報が中心となる。なので日本語習得には教授法の技術が必要になる。ろう者に対する日本語教授法に関する効果的な方法は確立していないため、子供同士で意思疎通を図るためのコミュニケーション力をどのように育てるのがすごく大切である。そこをはっきりと頭に入れておいていただきたいと思います。

つまり目で情報を得る、目で捉えることはとても大事で、それが手話につながります。それを強く皆さんに伝えたいと思います。

以上で私の話は終わります。

○森本 棚田先生、ありがとうございました。

先生方、本日はどうもありがとうございました。これからお二人と私との間で、少し本日のお話に関連した話をしたいと思います。

私から少し先生方に質問といいますか、話題を振らせていただきたいと思います。

まず、岡先生にお聞きします。岡先生がそもそも手話を勉強しようと思ったきっかけからお伺いします。

○岡 私の場合は、ただ単に何か珍しい言語をやってみたかったのが理由で、音声言語は幾つか学ぶ機会があったので、それとは全く違う言語を勉強したいと思い、手話を始めたのがきっかけです。

○森本 それは、先生が手話も言語として、つまり、私たち日本語を母語とする者から見て、英語やドイツ語と同じような一つの言語として、手話を最初から見ておられたということでしょうか。

○岡 多分そうだと思います。別にそれには理由があったわけではなく、まだ手話は言語であると余りうるさくも言われてなかった頃ですが、何となく音声言語は、興味がある言語は勉強したので、全く違う言語がやってみたいなと思いました。

○森本 実際、手話を勉強して、研究されてどうでしたか。

○岡 音声言語を勉強するのとはすごく違うなと思ったのは、音声言語であれば、何語を勉強していても、必ず自分でフィードバックがあります。その発音が合っているとか間違っているとか、聞いて確認することができます。手話は、自分が出している手話を

確認できません。その当時教わっていた先生に、これはどうやってフィードバックをしたらいいのでしょうかと聞いたことがあります。

勉強や宿題をしている時には、鏡の前で手を動かせば、自分が出している手話は確認することが一応できます。でも、普段話している時は、自分が正しいものを出しているのか間違っただけのものを出しているのかが分からないのです。その時の先生の答えは、人間にはミラーニューロンがあって、赤ん坊が手話を覚える時も、確認する手段はないが、相手がやっていることと、それを鏡状態にした、全く鏡だと左右反対になってしまうのですが、そうではなくて、身体はそういうことができるようになっていたと言われ、そうかと思いました。いまだに、特に反対になる手話などは非常に不得意です。

○森本 なるほど、確かに言われてみればそうですね。

私は手話を勉強したことがないので、これからやってみようと思うのですが、フィードバックが得られないとなると、この年で始めるのは難しいかもしれません。

では、棚田先生にお聞きします。今の話の続きですが、大宮ろう学園で子供たちに手話を教える時に、岡先生は聞こえる者が手話を学ぶときに直面した、面白さと難しさの話だったと思うのですが、聞こえない子が学校で手話を学ぶ時に、直面する難しさは何かあるのでしょうか。

○棚田 ろう児たちが大変だと思うことは、やはり環境だと思います。ろう児たちは自然に身に付けた手話で話したい。でも、先生の手話のレベルに差があるので、先生に合わせてざるを得ない。例えば手話のあまりできない先生に合わせて子供が話すと、先生は「この子は言葉が足りないな」と思ってしまい、子供が損をする面があります。子供は主体性を持って、自分で考えて判断する力が育ちにくい面があるのではないかなと思います。その辺りは、子供たちは大変だなと思います。子供たちが「日本語が嫌い」というのは、日本語が苦手というマイナス的なとらえ方ではなく、日本語がわからないから自分には関係ないと思っている面もあるのだと思います。

○森本 なるほど、ありがとうございました。

もう一つ、最後にぜひ棚田先生にお聞きしたいのですが、恐らく今の話とも少し関係があると思います。日本に住んでいる、例えば外国にルーツを持つ外国人の子供や外国人が日本語を学ぶことは、日本語を学んで、日本の圧倒的多数の日本語話者とコミュニケーションができるようになるわけですが、ろうの子供が手話を学ぶと、手話が

できるほかのろうの人たちとコミュニケーションができるけれども、聞こえる人、私もそうですが、手話ができない人が圧倒的に多いです。そういう時に、私たち聞こえる側はどうしたらいいのか、あと、柵田先生から見て、私のような、聞こえて、かつ手話ができない人にどうなってほしいか、どうあってほしいか、その辺を教えてください。

○柵田 聞こえる人たちとのコミュニケーション方法について、自分の過去を振り返りながらお話ししたいと思います。以前の会社の職場は聞こえる人ばかりでした。ろう学校時代に口話法で育った私は声で話すのですが、まわりと全然通じません。そこで、聞こえる人の中でも、声で会話ができないので私をほったらかしにする人もいれば、筆談をしてくれる人もいました。しかし、筆談をしてくれる人もだんだん声だけになってしまい、結局コミュニケーションが中途半端になってしまいました。

別の聞こえる方とも筆談で会話をしましたが、書くのは面倒くさいからなのか、だんだん声だけになってしまいました。聞こえる人の場合、書いている言葉が日本語なので自然と声になってしまうのでしょうか。コミュニケーションがやはりうまくいなくなっていました。また日本語で筆談をしても、誤解が生じることがありました。

ある日、これまでの失敗を活かして、日本手話で話しかけてみました。駅で切符を買うときに、聞こえないことを言わず、「東京から大阪まで行きたい」、「新幹線の切符1枚」と手話で表現したら、駅員さんは驚きながらも、紙を用意してくれました。それでも私が /新幹線/ という手話を表したら、何となく分かってくれたようです。ろう者だからかわいそう、助けてあげなければ、ではなく、この人はコミュニケーション方法が違う人だ、外国人に会った時と同じだという反応になったのです。とても面白い経験でした。

そこからは日本手話でコミュニケーションを取るようになりました。以前相手に合わせて、音声や筆談をしていた時と全く違います。ろうの方で先に声を出さなければいけない、先に筆談でしなければいけないと考えている方がいるかもしれませんが、その考えを改めるべきではないか、それはろう者が解決しなければいけない問題だと思います。

聞こえる側は声があると自然に声で反応してしまうわけです。生まれて4日目で既に音の判断ができるわけですから、すぐ音に反応してしまう。でも、聞こえない私たち

は、聴者が音への反応がとても早いことが分かりません。ですので、こちらが声ではなく、日本手話で話をする相手も自分に合わせてくれます。そういう心の準備がろう者側に必要だと思います。まず先に音声を発してしまえば、聞こえる側が心の準備をしなくなってしまうので、聞こえない側がそういう自覚をしなければいけないと思っています。

○森本 本当に示唆に富んだ話をありがとうございました。先生方に本日お話を伺って、確かに生まれて4日目から私たちは音を聞き分けているので、それを当然だと思ってしまっているのですが、聞こえない人たちがいて、手話でコミュニケーションする人たちがいるのだということを、もっともっと身近に感じられるような社会になったらいいなと思います。

時間になりましたので、第一部はこれで終了したいと思います。

どうもありがとうございました。

【第二部】『手話言語に楽しく触れ合ってみましょう』

講師： 森田 明氏（学校法人明晴学園教諭）

司会： 今西 祐介（関西学院大学総合政策学部助教／手話言語研究センター研究員）

○今西 第二部のワークショップの司会を務めさせていただきます、関西学院大学の今西と申します。手話言語研究センターにも研究員として参加させていただいております。

私から第二部の講師の森田 明先生の御紹介を簡単にさせていただきます。森田先生は、横浜市立ろう学校、現在の横浜市立ろう特別支援学校をご卒業になられ、その後、亜細亜大学の経営学部にお進みになり、その間、ウェスタンワシントン大学にも留学されました。そして、玉川大学の通信教育を経て、現在、学校法人明晴学園中学部の教諭をされておられます。現在、明晴学園では、小学部から中学部の手話科を担当されておられます。この手話科というのは、いわゆる国語に当たる科目だそうです。さらに森田先生は手話ポエム、あるいは手話語り話者として数々の作品を発信しておられます。幾つかその作品を御紹介いたしますと、「手話語りを楽しむ会2007」や「ろうのくに」、「手話絵本」など、今挙げたもの以外にも多数出演あるいは出版されておられます。

そして、本日、ワークショップを担当していただくのですけれども、そのワークショップに当たりまして、皆様に対してのメッセージを幾つか伺っております。

まず一点目は、日本語を忘れてほしいということです。日本語を忘れて、音声あるいは声は一旦お休みで、音声のない世界、日本語のない世界をぜひ楽しんで、そして経験していただきたいということです。外国に行ったような気持ちを味わってくださいというメッセージをいただいております。

二点目は、皆様お荷物をお持ちだと思いますが、ペンやノートといったものを全てしまってください、手ぶらで参加していただきたいということです。本当に色々なアクティビティを考えてくださっていますので、盛りだくさんだと思います。

それでは森田先生、よろしく願いいたします。

（ワークショップ）

○森田 皆様、お疲れ様でした。

楽しかったでしょうか。声のないワークショップ、声を使わないコミュニケーションは初めてでしたでしょうか。まさに今、手話を学び始めたということなのです。 /違う/ /そう/ /あなたは?/ や、十二支の手話も覚えましたよね。今、まさに手話の勉強をやっているということなのです。

手話は自然言語です。ですから、使わないと手話力は落ちていく、これは当たり前のことです。使えば伸びるということです。英語を学ぶ時と同じです。沢山英語を使っていけばどんどん伸びていきますが、何年も英語を使わなければ忘れていく、それも自然言語ですから同じです。手話もどんどんコミュニケーションをとっていけば伸びていきます。日本語、中国語、英語などと同じ言語です。

さて、手話は世界共通でしょうか。実は違うのですよ。なぜだかわかりますか。自然言語で、人工的につくられたものではないからです。それぞれの国、地域で自然に生まれた言葉なのです。世界共通ではありません。世界各国、それぞれ手話が違います。アメリカ手話もあれば、フランスの手話もあれば、イギリス手話もある、世界中それぞれの手話があるのです。ですから、例えばある国に行って、現地の人とすぐ手話が通じるかという、そうではないのです。

さて、身振りと言話の違いは何ですか。手話は表現する時間が短いです。対して身振りは長い。ワークショップ中に羊を身振りで表して下さった方いらっしゃいましたよね。モコモコとした羊の感じを表してくださいましたが、身振りだけではなかなか伝わりにくかったですよね。それが/羊/という手話でしたらすぐ伝わります。手話を身振りと誤解している人がたくさんいますが、実は違うのです。

なぜなら手話は自然言語だからです。悩み事の相談であったり、普通の会話であったり、手話を用いて深いコミュニケーションがとれるのです。身振りで相談事などできますか。身振りと言話は別です。

先程皆様は /あなたは?/ という手話を学びました。これを声と一緒にやってみてください。この形を声と一緒に表現できますか。難しいですね。どうして難しいのでしょうか。日本語と言話は言語構造が全く別だからです。文法も全く違います。ですから手話と日本語を同時に使うのは無理なのです。英語と日本語と一緒に混ぜて話ができますか。日本語の文法も英語の文法もそれぞれ違いますよね。

ただ、音声と言話を同時に表す手話の方法もあります。声を出して表現する手話、手指日本語といって、日本語の語順をそのまま置き換えたものです。例えば手話サーク

ル、手話講習会などでは、主に手指日本語を教えているようです。ですが、日本手話を母語とするネイティブサイナーは使いません。やはり日本手話を習得する方が良いです。そのためには、日本手話を母語とするネイティブサイナーであるろう者と交流し、手話の力を伸ばしていただきたいと思います。きっと上達すると思います。アメリカに長く暮らせば英語が自然とうまくなるのと同じですね。

今後、様々な手話と出会う機会もあると思います。それに日本語が付いていれば手指日本語、ネイティブサイナーの手話が日本手話です。そのような方法で見極めてください。

以上です。どうもありがとうございました。

○今西 森田先生、どうもありがとうございました。

音のない世界を皆様、経験されたと思います。

もし、皆様方の中で先生に何か聞きたいことがございましたら、挙手をお願いします。

○質問者1 本日はありがとうございました。すごく楽しかったです。

全く手話の経験がなく、手話に触れたことがなかったので、こういった機会があつて触れることができよかつたなというのと、素朴な疑問なのですが、ネイティブサイナー、もともと聞こえない方と途中から聞こえなくなった方に対して、我々聞こえる者の接し方や、気をつけなければならない点を、教えていただければと思います。お願いします。

○森田 中途失聴の方ということですね、御質問ありがとうございます。

中途失聴の方、沢山いらっしゃいます。生まれつきのろうの方とは違います。中途失聴の方は途中まで聞こえていましたから日本語を獲得しています。そして、聞こえなくなつてから手話を習得するので、やはり音声言語と手話を合わせた手指日本語が多いかもしれません。ですから、出会つた時に、中途失聴の方もいるのだ、生まれつき聞こえなくて、日本手話で育つた方もいるのだということを知つて自分の学びたいところに入れば良いと思います。こんな答えでよろしいでしょうか。

○質問者1 ありがとうございます。

○今西 この機会に、何か質問などございましたら。

○質問者2 森田先生、いつも話が面白いのですが、御自分でどうして面白いと思われまつか。

○森田 どうしてと聞かれても、少し答えにくいですが、大事にしていることは、言語を

きちんと理解していただくために、楽しみながら学んでほしいということです。英語もそうです。皆様、中学ぐらいから英語の勉強を始めましたよね。今、覚えていますか。文法ばかり教えられて楽しい雰囲気ではなかったですよ。

海外に行くとか、自然に人と触れ合って楽しく学べば習得しやすいですよ。楽しみながら学んでいくことが大事だと思うのです。そう思えなければ、なかなか身につかないと思います。手話を学ぶ機会が必要だなと思えば、必要に応じてどんどん伸びていくでしょう。楽しみながら学んでください。

○今西 以上をもちまして、第二部のワークショップを終わりたいと思います。

最後、閉会の挨拶を松岡先生からお願いいたします。

## 閉会の辞

松岡 克尚（関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員）

○松岡 関西学院大学の手話言語研究センターの研究員をしております。最後になりましたが、閉会の挨拶を私から申し上げたいと思います。本日は、二部構成で実施いたしました。それぞれ沢山の方に御参加いただきまして、本当にありがとうございました。第一部では岡先生、棚田先生からそれぞれ御講義をいただき、さらにお二人の対談を通して、手話言語と音声言語の違いを学ぶことができたのではないかなと思います。

第二部では、手話のまったくの初心者の方、あるいは手話言語の学びに関心のある方を主に対象にしたものでしたが、森田先生からの音声なしのワークショップを通して、日本手話の基礎的なことがらを学ぶことができたのではないのでしょうか。

私は、実は専門は手話ではなくてソーシャルワークですので、どちらかというところと内容が社会学に近いところがあります。例えば、皆様お箸を使うに当たって、色んな礼儀やルールがそこにありますよね。それは手が、指があるからこそそうしたルールができたという風に解釈できます。もし皆様に指がなければ、食事をするとき、例えば舌だけで食事をするとしたら、多分、舌の使い方に様々なルールができると思いませんか。このように私たちの身体に応じて、社会や環境に向き合っており、その中で身体の特徴からルールや習慣、もっといえば文化というものを形成していていることが理解できます。恐らくコミュニケーションも全く同じで、自分の身体づくり、耳が聞こえる、聞こえない、目が見える、見えないなどのづくりを通して社会に向き合っていく中で、自然にそれに適したコミュニケーションの仕方が定まり、聞こえない人たちの中で独自のスタイル、すなわち手話言語を形成してきているのだというお話と、この身体に応じた文化形成という話は少し通じるころがあると思います。私は、この身体に応じた文化をソーシャルワークの観点から支援に活用できないかという研究をしています。

さて、本日お話くださった三人の先生方のお話に通ずるのは、それを私なりにまとめてみますと、日本語とは異なる自然言語としての手話、すなわち日本手話が存在しているということ。そして、最後のほうにもフロアから質問がありましたが、中途失聴の方はいわゆる日本語対应手話、手指日本語を使われる方が多いですが、それと日本手話はまた違ったものであるということ。そして、同時に手話言語の多様性とい

うか、世界にも色々な手話があるということも学べたのではないかなと思います。それらのことを通して、私たちのこの社会は、コミュニケーションや生活習慣の上でも実に豊かな多様性で成り立っていることも学ぶことができたのではないのでしょうか。

そして、私たちの社会を、これからこの多様性を尊重する社会にしていかなければいけません。そして、この多様性を尊重するためには、自分と異なる相手のこと排除するのではなく、まずはその相手を知ろうとすることがそのための何よりの第一歩になるのではないかなと思います。その意味での、多様性の一つとしての手話言語というものを学ぶことは、社会における多様性理解の一つのきっかけ、多様性を尊重する社会にしていくための一歩になるのではないかなと信じている次第です。

私たちの手話言語研究センターも、こういった趣旨で手話言語を研究し、その成果を社会に広めていくことを目指して昨年つくられました。そして、今年から日本財団から助成金をいただくことになり、そのおかげで本日のこの企画のようなこともできるようになりました。

手話言語研究という分野で得られた色々な学びとその成果が、手話言語研究という狭い領域にとどまらずそこを越えて、広く社会の中でも様々な形で活用されていき、社会の中の色々な価値観をまた変えていくことができればいいなと思っています。

最近、色々な自治体で手話言語条例がつくられるようになってきています。この9月に「聲の形」という映画が上映されたのは、皆様ご存知でしょうか。これは、手話を使うろうの少女が主人公の一人になっているアニメの映画です。こういう映画も一つのきっかけになって、手話言語に対する関心が広がりつつあるかもしれないことを考えると、本日の企画は時期に合った催しではないかなと考えたりします。

今後とも、色々な関心と呼び寄せるような催しを開催していきたいなと思っています。関西と関東でそれぞれ開催する計画していますので、ぜひとも、アンケートに、様々なアイデアを出していただいて、それらを参考にさせてもらえたらなと思いますので、どうぞ御協力をお願いします。

最後に、関西学院大学の中の手話言語研究センターのことですが、皆様は東京の方、関東の方ですので、あまり関西学院、呼び方も「かんさい」学院と間違えられたり、関東学院大学さんと間違えられたり、残念ながらこちらでは知名度がない大学なのですが、これをきっかけに関西学院、「かんさい」学院ではなく「かんせい」学院、この名前を知っていただければと思う次第です。ちなみに小池百合子東京都知事の出身校

でもあります。小池知事はアラビア語が学びたいということで関西学院大学を中退されて、カイロ大学に留学されたということで、そういう方の出身大学でもあるということで本学の名前を覚えておいていただけたらうれしく思います。

私からの挨拶は以上ですが、最後に、本日色々お話をいただきました岡先生、棚田先生、森田先生に改めて御礼申し上げたいと思いますので、皆様、どうぞ拍手をお願いいたします。

本日は手話通訳と要約筆記、とても見事なものだったと思います。いずれともにご担当くださった東京手話通訳等派遣センターの皆様にも厚く御礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

皆様、本日はお疲れさまでした。これからもセンターをどうぞよろしく願います。

## 登壇者紹介

- 岡 典栄 (学校法人明晴学園国際部長)
- 棚田 茂 (埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園主幹教諭)
- 森本 郁代 (関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター副長)
- 森田 明 (学校法人明晴学園教諭)
- 今西 祐介 (関西学院大学総合政策学部助教／手話言語研究センター研究員)
- 松岡 克尚 (関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員)

□当報告書は、2016年10月2日にステーションコンファレンス東京で開催された手話言語研究センター講話会の内容を再現したものである。

#### 手話言語研究センター講話会

---

開催日時 2016年10月2日 13:30～15:45

開催場所 ステーションコンファレンス東京

主催 関西学院大学手話言語研究センター

---

#### 手話言語研究センター講話会報告書

---

2017年3月27日発行

編集 関西学院大学手話言語研究センター

発行 関西学院大学手話言語研究センター

〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町1-155

電話 0798-54-7013

FAX 0798-54-7014

---





